

劇団きづがわ第 70 回公演
第 39 回大阪新劇フェスティバル参加

東の風が 吹くとき

あの日変わってしまった故郷 それでも老夫婦は生きる この地で

東日本大震災・福島原発事故から4年……

《福島に生きる》人々の願いをこめて再び贈る感動のドラマ

演出・林田時夫
作・高木 達

とき：6月20日（土）PM2:00&PM7:00
21日（日）PM2:00

ところ：リバティーおおさか
（JR環状線 / 芦原橋駅下車南へ 600m）

入場料：前売り一般 3,000 円
学・障・シニア（65才）2,500 円
夫婦 5,000 円
（当日券はいずれも 1 人 500 円 UP）

東の風が吹くとき

『東の風が吹くとき』

福島に風は吹く。福島に花が咲く。
福島は故郷です。福島は人生です。
福島に生きる。福島を生きる。

この物語は「東日本大震災」のあった5日後、
2011年3月16日の夕方から始まる。
福島第一原子力発電所から40キロ離れた農村の一隅。

そこで慎ましく暮らしてきた3世代にわたる酪農一家。

だが、放射能汚染によって生きる術を断たれた、息子夫婦や、孫娘夫婦と幼子は、それぞれに村を棄て新たな地へと離散して行く……

あの日から変わってしまった故郷。それでも老夫婦は生きる。この地で……

これは原発事故告発のドラマではない。

生まれ育った土地を愛し、自然と共に生き、お互いを慈しむ。そんな老夫婦の愛のものがたりである。

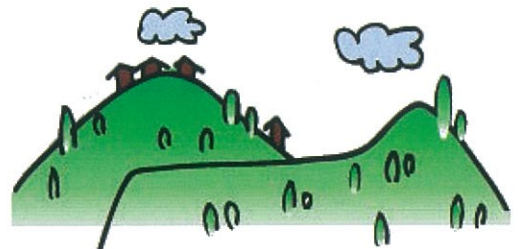
『東の風が吹くとき』は、劇団青年座の劇作・演出家である高木達（とおる）さんが、震災を機に故郷・いわき市に帰り、いわきの演劇を愛する仲間たちと共に創造した『福島に生きる』感動のドラマである。

その公演は昨年、地元・いわき市に止まらず、東京公演も行われ、多くの人々に深い共感を呼んだ。

東日本大震災と福島原発事故の悲劇から3年半――

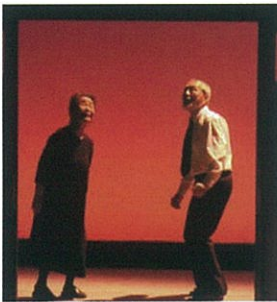
劇団きづがわが、「福島に生きる、福島を生きる」人々のドラマに挑みます。

（冒頭の一節は、同じく福島在住の詩人・和合亮一さんの詩「決意」から引用させていただきました。）



《スタッフ》

作／高木 達
演出／林田時夫
同補／山田一己
美術／和田雅子
装置／三村省三（神戸ドラマ館ホレロ）
照明／新田三郎（フリー）
効果／田坪文一（劇団せすん）
道具／河原正隆
舞監／小森健司（フリー）
同補／北尾利晴（フリー）
製作／和田雅子
池田広美
福島光司
椎名千浪
音楽等協力
いわき演劇の会



（2014年大阪新劇フェスティバルで男優・女優演技賞を受賞した主人公の老夫婦を演じた二人）



《キャスト》

佐藤倉治（73才／酪農と農業） 山本惣一郎
佐藤ムメ（その妻／70才） 和田 雅子
佐藤正勝（次男／48才） 山田 一己
薫（その妻／46才） 西尾 純子
菜花春恵（長女／25才） 林田彩／橋野悦子
輝夫（夫／27才） 寺島由浩／島本拓治
咲子（娘／5才） 山本碧愛（声 上敷舞風）
江頭一步（脱サラ酪農家） 島本拓治／寺島由浩
大沼 卓（福島新報記者） 河塚 俊哉
鈴木 瞳（役場畜産課職員） 橋野悦子／林田彩
佐藤喜一（同男性職員） 青埜 充裕（劇団息吹）
鯨岡芳明（精密部品経営者） 中屋 光雄
（原発近辺の町から避難してきた人たち）

リバティおおさか略図



リバティおおさか（大阪人権博物館）
〒556-0026 大阪市浪速区浪速西 3-6-36
TEL:06(6561)5891

「二人一人の台詞、
良いなあ。人の温もり、
優しさ、そして自然の中に生きていく、
感動しました。」
（F・Rさん）



「日本を、地球を良くしたいと選挙を精一杯頑張って、ご褒美に心暖まる芝居を観賞することができ、幸福な気持ちで一杯です。感動をありがとうございました。」（A・Tさん）

「とても感動しました。何回も涙を拭かねばなりませんでした。単刀直入な政治的メッセージと対照的に、じっくりと感性を通して、心に沁みる演劇です。倉治・ウメ、老夫婦の演技、絶妙でした。」（革新懇代表世話人・渡辺武さん）

東風だ……。3月に東風が吹くと、様々な草花が芽吹き始めるんです、この村では……。でも、あの日の夜は……